

## Supporters of Togenshosa Training Camp from Which Children Go to School

林口, 彰  
財団法人「孔子の里」

<https://doi.org/10.15017/9053>

---

出版情報 : 生活体験学習研究. 4, pp.115-120, 2004-01-30. The Japanese Society of Life Needs  
Experience Learning

バージョン :

権利関係 :



とうげんしょうしゃ  
東原 庠 舎の通学合宿を支えた人々

—地域婦人会 (元教師) と高校生—

林 口 彰

Supporters of Togenshousha Training Camp from  
Which Children Go to School

Hayashiguchi Akira

【1】 東原庠舎(とうげんしょうしゃ)と多久聖廟(た  
くせいびょう)

多久市は、佐賀県のほぼ中央にあり、周囲を山で囲まれた盆地です。人口24,000人足らずのどかなこの多久は、今や「文教の里」として脚光を浴びています。そのシンボルというべきものが、儒学の祖「孔子」を祭る「多久聖廟」です。

今から約300年前の多久の歴史をひもといてみましょう。多久は、藩ではなく邑(ゆう・小さな村)でした。ここに、多久4代領主多久茂文(しげふみ)が登場します。当時の多久は、貧しく村人たちの心はすさんでいました。茂文は、村人たちの心を豊かにするために、朱子学を村づくりの柱にしたのです。そこで1699年に、学問所「東原庠舎」を設立しました。しかもこの学問所は、武士の子弟だけでなく町人や農民に広く門戸を開いたユニークな学問所でした。ここで学んだ方々で、我が国の電気工学の祖といわれる志田林三郎や明治憲法の刑法などに参与した鶴田斗南(となん)、また石炭王といわれる高取伊高(これよし)など優秀な人材が生まれました。

しかし、茂文は学問所だけでは村人の心は豊かにならない。学問も大切だが、村人たちが思いを寄せる形が必要だと考えました。そこで、孔子の教えのシンボルとして、孔子を祭る聖廟を創建しました。1708年に、村人たちの心が一つになって、3年の歳月をかけて完

成しました。こうして多久には、東原庠舎という学問所と、そのシンボルとしての多久聖廟ができたのです。言い換えれば、多久には身分を問わず志のある人が学べる学校と、村人たちが誰でも自由にお参りでき、形として見ることのできる聖廟ができたのです。この多久聖廟は、創建以来295年、一度も火災や震災で焼失することもなく、今日まで市民の精神的シンボルとして存在しています。今でも多久には、「多久の雀は、論語をさえざる」「多久の百姓に道をたずねたら、その百姓が静かにくわ(鋤)を置いて人の道を説いた」などの言葉が残っています。

平成2年に、ふるさと多久のもつ美しい自然と学芸文化のもとに、市民が結集して新しい歴史と文化の創造に努め、明るく豊かな里づくりを目的として財団法人「孔子の里」が設立されました。また、平成3年には、多久聖廟に隣接する宿泊研修施設「東原庠舎」が完成しました。宿泊定員40人、日帰り研修定員100人の「平成の東原庠舎」です。財団設立以来、聖廟と東原庠舎を中心に、各種行事や事業を展開しています。

聖廟関係では、約300年続いている春の釈菜(せきさい・4月18日)と秋の釈菜(孔子祭・10月第3日曜日)の大きな行事があります。

東原庠舎関係では、20の企画事業と6教室を実施しています。事業では、中国旅行、書道作品展、通学合宿、全国ふるさと漢詩コンテスト、漢字セミナー、学

業成就親子の集い、論語カルタ大会、中国音楽講師による演奏活動などです。教室は、中国語会話教室、太極拳教室、論語教室、絵手紙教室、似顔絵教室、中華料理教室を実施しています。

## 【2】 気づかせ、分からせ、奮い立たせる～東原厩舎の通学合宿

平成11年度から、通学合宿事業に取り組みました。この事業に取り組むにあたって、福岡県嘉穂郡庄内町の「生活体験学校」を訪問し、職員の方から貴重なお話を聞き事前研修を十分行いました。ここでは、自炊、動物飼育、堆肥作り、農作業、工作などさまざまな体験をしながら通学する施設です。

さて、東原厩舎は、多久聖廟（国重要文化財）の隣接地にあり、いろいろな体験ができませんが、地域の方々との触れ合いや自然を通して豊かな心を育てる環境があります。そこで、通学合宿のモットーを、「気づかせ、分からせ、奮い立たせる」としました。この合宿は、なるべく大人は口や手をださず、命令や指示をしないで生活させることです。トラブルがあるのが当たり前、それを子供同士で解決させようというのです。失敗するのは当たり前、それをどう乗り越えて行くかを大切にしたいのです。ただし、命に係わる失敗は絶対させないように、関係者は見守ることにしました。

各年度の実施状況は、次のとおりです。

### ◎平成11年度

- ① 9月28日～10月2日（4泊5日）  
（参加校1校 参加者小学3年～6年  
男13人 女15人 計28人）
- ② 11月2日～6日（4泊5日）  
（参加校1校 参加者小学4年～6年  
女16人 計16人）

最初の事業でしたので、地元の中部小学校にのみ募集の依頼をしました。その結果、20人の募集定員に対し、50人近くの応募がありました。学校へ相談したところ、2回実施してくれとの強力な懇願がありましたので、2回に分けて実施しました。

この合宿に直接かかわった方々は、地域婦人会4人（元教師・2人交代で宿泊）、児童愛護班3人（レクリエーション指導）、王艶さん（中華料理指導）です。

### ◎平成12年度

- 9月19日～23日（4泊5日）  
（参加校2校 参加者小学1年～6年  
男12人 女28人 計40人）

参加校が2校になり、小学1年生から6年生まで参加しました。異年齢集団の素晴らしさが随所に見られ、子供達のリーダーシップやメンバーシップが大いに発揮されました。また、ボランティアとして、大学生が全期間通して参加してくれました。

この合宿に直接かかわった方々は、地域婦人会2人（元教師）、大学生3人、公民館主事1人、児童愛護班2人（レクリエーション指導）、王艶さん（中華料理指導）です。

### ◎平成13年度

- 9月18日～9月22日（4泊5日）  
（参加校4校 参加者小学4年～6年  
男10人 女29人 計39人）

参加校が、4校に増えました。初めてボランティアとして、高校生が参加してくれました。また、この事業がより充実するように「地域ふれあい交流委員会」を組織し、参加者の保護者を対象に「子育て講演会」を開催しました。

この合宿に直接かかわった方々は、地域婦人会2人（元教師）、高校生2人、児童愛護班2人（レクリエーション指導）、王艶さん（中華料理指導）地域の指導者6人（みそ作り、ジャム作り、みかん狩り）です。

### ◎平成14年度

- 9月24日～28日（4泊5日）  
（参加校6校 参加者小学4年～6年  
男14人 女26人 計40人）

参加校が、市内7小学校のうち6校になりました。また、通学合宿のシンボルマークを募集し、旗も作成しました。合宿期間中は、玄関前のポールに掲揚します。「子育て講演会」も開催しました。

この合宿に直接かかわった方々は、地域婦人会2人（元教師）、高校生4人、児童愛護班2人（レクリエーション指導）、王艶さん（中華料理指導）、陶芸家2人（焼き物指導）、農協職員2人（みそ作り）です。

**【3】 通学合宿に直接かかわっていただいた、地域婦人会の方の感想文を紹介します。**

平成11年度、東原岸舎が初めて取り組んだ通学合宿に参加したH・Kさんです。

「かねて、世の移り変わりに、教育のむつかしさ、大変さを感じ、国の宝である少ない子供の成長に、日本の国は先々どうなるのだろうかと不安を抱いていた。おりもおり、今回思いがけない機会を得、地域の子供に接する喜びと、少しでもお役に立つなら精一杯頑張ろうと開会式にのぞんだのである。今思えば、恥ずかしい限りであるが、正直に綴ってみたい。

この合宿を企画された意図は、現在の少子化社会の中で、規律正しい合宿を体験し、基本的生活習慣を身につけさせるものだと独り合点し参加したのである。ところが、私には理解できない事ばかりで失望した。

- ①受け入れ側の社会教育のベテランの不在（林口、孔子生誕2550年祭に参加のため中国へ出張し、3日めから参加）。
- ②ずさんな計画に驚く。何をやるにも目標、指導過程、結果が常識の私達には、考えられないことだったし、これに学習があるものかと。また、他団体の利用による部屋の重複、夜10時過ぎても子供の居場所がない状態。多数の子供の通学合宿でありながら、全面的受け入れでなく計画に主体性が感じられなかった。
- ③何も口だしせず、子供達でよりよい共同生活を見つけ出させるとのこと。無の中から有とは、大人でもむつかしい。子供は、なおさら有を生み出すのは豊富な経験と環境が必要である。何よりも先生の有への手立てが見たかったし、期待していたので残念だった。

しかし、一回目の終わり頃から冷静に考える時、企画の趣旨が違っていた事に気づいた。連絡がよく取れていないところに原因があり、誤解し自分なりに悩んだのである。それも、今の実態にあった教育のあり方の勉強不足だったのだと思う。現在の子供の遊びが、テレビゲームなど一人遊びが多く、集団での遊びや生活の中で培われる最も大事な協調性や思いやりの大切さが欠けていることからへの配慮だったのだと気づき冷や汗を覚える。昔であれば何でもないことが、現在様々な環境で培われにくくなっていることを痛感させ

られ、子供達同士が自然の中で土や動物と遊べるよう応援したいと思う。最後に、現代に生きる子供や社会教育のあり方などを、改めて深く考えさせられる通学合宿の貴重な体験をさせていただいた事に感謝したい。」

次に、13年度に参加したN・Oさんの感想文です。

「通学合宿参加も、3年目になると緊張も和らぎ、自分に課せられた立場も考える余裕さえ見え始める。今までは、家庭の延長そのままの気持ちで子供達にかかわり、何の不思議も感じない自分から、何か変であることに疑問を持つようになった。

現在おかれている子供達の環境は、核家族であり少子化が多く、何の不自由もなく豊かな生活を送っているように思われる子供達である。その子供達が、テレビもない、食べたいお菓子もジュースも全くないのに、ここでは生き生き楽しそうに生活する。

広い静かな場所で、仲間がいっぱいいる。のびのび走り回り、夢中で遊ぶことにより、人のいたみも友達と仲良く支え合うことの大切さも自然と身につくよい機会である。

次に、規則で動き指示を待ってやるのではなく、自分の考えで決めて、日常の生活を送っている。その出来栄には関係なく満足感あふれる態度である。それぞれの生きる力を獲得し、伸びようとしている子供の姿こそ素晴らしい。大人は、じっと辛抱して見守り育てていくことの大切さを知らされた思いがする。

また、高校生や地域の方の応援で思い出に残る取り組みも多かった。みそ作りやアンズジャム作りなど実体験し、働くことの楽しさや食べるまでの大変さを知り得たことなどは、素敵な喜びであろう。

今後の課題として、早朝の聖廟参拝や論語の素読など東原岸舎ならではの思いで作りを加えてみたらどうだろう。」

**【4】 平成13年度、お兄さん役として活躍した高校生の感想文を紹介します。**

「私は、今回この通学合宿に参加できて、子供に対する考え方が変わったように思います。何が変わったかということ、まず年上の子が、年下の子の面倒をよくみてくれていた部分です。やっぱり1歳年が違えば、勉

強でも運動でも、いろいろな面で差があります。しかし、その差を、子供達同士で解決していたのです。なぜ私がこんな事を思ったかという、小学4年生の宿題に算数があって、その小4の子は計算が不得意だったのです。そうしたら、周りの他の小学校の5年生や6年生の子が、優しく教えてあげていたのです。その光景を見た時、今の子供はとても心が優しいと思いました。食事の時は、私も入れて親のありがたさが分かったような気がします。なぜなら、いつも食器は自分で洗わないからです。朝食と夕食後、子供達が自分の食器を洗っている様子を見ていたら、とてもぎこちない感じだったのです。多分これを機会に、子供達が家で手伝いをするようになったらいいなと思っています。

少し話は変わりますが、私が合宿で困ったことが二つあります。まず何に困ったかという、子供達の衣類の洗濯にすごく困りました。一回では洗いきれなかった時は、二回に分けて洗いました。寝るのが2時や3時になり、授業中に居眠りをして先生に注意されたり、その間の授業内容をあまり覚えていないことです。

そして、二つ目の問題は弁当です。小学生は給食ですが、高校生は弁当が必要です。そのため、弁当を作るために早起きしなければならないのです。でも前にも書いたとおり2時や3時に寝て、早起きなどできるはずもなくとても困りました。しかし、婦人会のおばさん達が手伝ってくれて、とても助かったことを忘れません。ほかにも喧嘩があったり問題はあったけど、合宿が終わればそれもいい思い出です。

それから、私がどうしても忘れられない事があります。それは、夜、中国の楽器を趙勇（ちょうゆう）さんが演奏していただいた事です。強く心に残っていて、今でも忘れられない事です。他にもいろんな事があって、この文章を書いていて思い出すと涙が出てきました。本当に、良い体験ができたと思います。

最後になりましたが、林口さんや、田島さん、他にいろいろな方々に迷惑をかけたと思います。しかし、多くの人々のおかげでいろんなことを体験し、身をもって知ることができ、とても良い通学合宿だったと思います。本当にありがとうございました。そして、お疲れさまでした。」

## 【5】 まとめ

東原庵舎の通学合宿に、4年間もかかわってこれた婦人会のN・Oさんが語られた言葉が、とても印象に残りました。

「学校を卒業してから、小学校の教師になりました。それ以来40年間、子供達や保護者、地域の皆さんから『先生』と呼ばれてきました。この呼び方に何の抵抗もなく、自分でも納得していました。定年を迎え退職しましたら、すぐ地域婦人会の会長に選ばれました。それからは、会員の皆さんや地域の皆さんから『会長さん』と呼ばれるようになりました。それも納得していました。そう呼ばれるのが、当たり前のことだと思っていました。ところが、通学合宿が終わってしばらくした頃、買い物に行ったスーパーのお店の中で、『Oのおばちゃん、こんにちは』と子供達から声をかけられました。最初、誰のことか分からずにボカンとしていましたが、やっと自分のことだと気づきました。今までが、ほとんど先生と会長さんと呼ばれてきた私です。子供達から名前を呼ばれて、50年ぶりに本当の自分に戻った感じがしました。体が熱くなり、心が震えました。まさに感動の一瞬です。今の世の中で、この通学合宿は子供も大人も成長させてくれる最もふさわしい事業だと感じました。一人でも多くの子供達が、また地域の方々に参加されるのを大いに期待します。」

13年度に参加してくれた高校生は、次年度生徒会長に選ばれ、校内のリーダーとして大活躍をされました。高校を卒業するときに、将来について語ってくれた言葉が心に深く残っています。

「ぼくは、通学合宿に参加して一番良かったことは、人が好きになりました。特に、子供達と一緒に生活していると、子供達の素直な心の良いところが見えてきます。すると自分の心が落ち着くし、勇気が湧いてくるのです。だから僕は、子供にかかわる仕事に就きたいと思います。」彼は現在、保育士を目指して大学で学んでいます。通学合宿に参加することによって、自分の人生の目標が決定したのです。

東原庵舎の通学合宿は、地域の方々の協力によって、年々充実しています。特に、直接事業にかかわる方々の働きは、素晴らしいものです。婦人会のお母さん役、それにお兄さん役、お姉さん役の高校生とのコンビは、絶妙な演技で子供達を魅了します。この通学合宿には、



